バレンシアガにおける選択とカデンス

現代ファッションにおける空間の分離

Aldo Poblete Varas

寒い北。攻撃警報。完全に破壊されたコンフォートゾーン。美的破局、若者の解放。永遠の、野生の詩としての闇。破壊するロボット。地獄のなかのランウェイ。地政学的な精神病院の内部での思弁。根源的な幾何学のなかの美。身体の気質のなかの形と色。熱に浮かされた神話的な錯乱に属する、初歩的な超常現象。後期の感覚体制の荒涼におけるスペクタクル。概念の森の薄明に潜む、数学的な厳格さの雷鳴。失われた均衡の準形而上学的な反映としての、禁じられた神々への呼びかけ。市場によって、また美的宗教の生成によって変容した基体。セリーヌを読む不運な動物たちは、沈黙が幾世代ものデジタル・ミュータント全体に蒔いた異端の気候を見分ける。輸送と分解、磁気、そして出版物の流通能力。宇宙的な奇形への入門。福音伝道者の基体。外では、黒い神が、すべてを埋め尽くした天上の大理石を幾百万もの自分の身体にまとわせ、すべてを供犠に差し出している。飢え、災厄、無意味。テーブルに並べられた武器。何世紀にもわたる対話の結論。このクラブへの入場に必要な身分証明を持っているのは誰か。誰もいない、まったく誰も。そこからプレタポルテの民主化が生じる。

ふたたび、クラブのなかの動物たち。鋭すぎるリフの思弁、専制的な体制との境にあるもの。東京から北京へ、その経路は制約され、うろたえている。コンバットバッグ。咆哮のなかの、特定のコードを振るい、特定の新たな真理を求める思春期の叫びのなかの、過剰に合成されたパン屑。多義性の誕生の破局。芸術家の策略と不穏。背景がこのように振る舞うのは、ある身体たち、過剰に搾取され飽和させられたある本質性たちが、自らの可能性の根拠そのものから動かされた途方もない巨大制度として現れるのを許すためだ。基体が超越論的な巨大企業という観念に接続される、巨大で抽象的な技術上の画期として。そこでは、身体性はその世界‐可能性において概念化される。そこでは、最小限の実存が構想され、絵画、音楽、そして巨大なものの重み

によって完全に飼い馴らされた批評の、濃密で粘つく震えに触れる。現実の版とは、不純なものと道徳を説くものの大聖堂となったデジタル性の、服従を強いる正常さから逃れるものだ。

歴史から学ぶことがこれほど難しかったことはない。そもそも、服装について語るとき、何について語っているのか。イライザ・ダグラスはブランドのなかで何を変形しているのか。それは、われわれが論じているこの準美学的な枠組みの、垂直化された幾何学の反映なのか。それとも、より大きな何かのリゾームのなかの結節点であり、解剖のために手術台に横たえられたこの途方もない動物のなかで、自らを現そうとしているのか。世界の近代化は、物質性の人格化を駆動する理想の一つだ。人類2.0について語るとすれば、それは、轟く宿命から解放された歴史のグラマトロジー的な体制の内部で起こるだろう。高級文化の核心にある戦争、進歩の象徴、そしてレトロな機械装置の無力化。それは、テーブルの上の象徴に響き合う事柄の徴であり、ブラックメタルの無頭の力、水平な流路を持つ無限の河である。それらすべてが、末端の自動化された流れの新しい物質性によって結び合わされている。素朴な現象学の全面的な拒絶。ここでは、超越論的なものは、潜在的なテクストの多義的な力に対応しない。そして、まさにその点にこそ、このような文脈において美学から掘り出せる真の関心がある。能動的に相互作用し、影響し、感染させ、自らの可能性の条件を解釈し直しているのは、対象そのもの、物質そのものだ。それは、物自体的なものが舞台に登場することであり、境界を定めようとする眼には、絶対そのものを吸収しようと切望する技術科学的資本主義の、もっとも卑劣な現れを表す形で登場する。だが、そうした読解は、現状に従属するどころか、ある種の人間的経験の徹底化が解き放ちうる可能性の地平を理解し拡大することに、何ら寄与しない。

無限の硬直。コンクリート、具体的な概念。セメント、西洋の基礎。過去に刻み込まれておらず、古代の、自然的な古典期ギリシアに何の暗示も向けない未来。極地の黒、生そのものの黒。レインに、すでに何十年ものあいだ人類に住みついていたデジタルなものに埋め込まれた反映。取り戻され、生き返らされたもの。基体から、世界を貪り続けるために全力を尽くす動物の満足。領土の消毒、灰色、ネオ東京の線路に沿った側方性。同等の音あるいは騒音、不可能な消毒。セントラルヒーティングの価格は無限だ。解放をもたらすコンクリートは、ロサンゼルスや他のいかなる大都市の速度も意識のなかで脱中心化しうる、無限の構造的地平を通じて、われわれの理解を強制的に中心へ据えてきた。ヌーメノンのなかでの、顕現の質。根源的な自己意識。

これほどのやり方で観念のあいだをスキーで滑るのは誰か。これらの形態の持続可能性を、不用意に吸収するのは難しい。個人的な空間を分かち合うこと。中立的な装置の内部で概念を中心に据えること。沈黙。ネオンの強さ、脱構築的なパターンの内部での非合理なものの道徳的優越。芸術は、水中の胡桃のように割れて開く。黒い水、絶対的恐怖のフィールドに対してリアルタイムの防御を築きうる結晶。欲することが欲しているのは、液体によって、スクリーンやテンプレート、図式、儀式、悪魔崇拝、上質な素材、そしてその苦痛の周縁で周期の進行を食い止める電子ドラムの流行によって、なだめられることであるような世界で。美が、デザイン学校、美術アカデミー、有機的な実験室の、心的なワンルームの痕跡のなかで新たな価格を見いだしますように。自己受容の出現。

思弁的な錬金術。西洋の美的カノンの教義に従って重要であるものと重要でないものとの、様式および接続の基体。border-line。超越は、壁に対して、またポストヒューマンのイメージを生産する鈍感な能力に対して、絶え間ない戦争のなかにある。あらゆる内在の背後には、例外的な疑いの獰猛なフィルターが住みつき、そこでは野蛮が高級文化と共存する。過熱したシステムのあらゆる頽廃の背後で、自覚的な構造上の冷たさがある種の雰囲気を保っている。何らかの脈動が、努力の災厄のなかで、救いようがなく、悪魔的な専門化をも超えた生命的なDJの無意味のなかで、何かを語りうる。退行的な卓越によって災厄となったこの許しがたい掩蔽壕の宇宙的空間に持ち込まれたバンドの努力において、すべてはモデルの内部で起こり、概念の外部には何もない。ファッションの地政学、天上の戦略家の合理性。不協和な新語のアルゴリズム的幸福に身を委ねた生の力。つねによく熟慮された騒音の種蒔きと慈悲の稽古において、カリフォルニア、デュッセルドルフ、大阪は、いかなる形式的な規格化からも遠く離れた、奇妙で隔たった言語の誠実さに感染しようとする異質な創意として作用する。その言語を、自然の生成は単調な音、記憶のアンビエント、自身と三百回等しく、その影とは異なるものへと変え直そうとする。言語の横領、感覚の廉潔。幽霊たちは、装飾的な筆致のなか、裁断室のなか、そして憧れの鉢の内部に住んでいる。形式的な補足、非形式的な不適合。時間外の幻滅によって、あらかじめ閉ざされている。ポリマー、シリコンの幽霊、自然の運命がこの宴にもたらしうるその瞬間性を持つ力における、エクトプラズム的な縮減。